慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	G.D.H. : Cole guild socialism
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.3 (1921. 3) ,p.459(149)- 461(151)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210301-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

勞働市場論

The Labor Market. By Don D. Lescohier. (New York: The Macmillan Company. 1919. pp. XII. 338.)

失業問題は歐洲戰後に歐米の經濟社會を襲ひつゝある不景氣と共に、世間の注意を惹くこと著しきに至つた。然し失業問題を專門に論究した單行本は其數に於て、甚だ乏しく、ビーヴエリッヂ氏の失業論の如きは、其乏しきもの、內の一ツであり、殊に著者が英國勞働行政に於て、權威者たることの關係から、特に重んぜられたはうであつた。今吾人は同樣の系統を追うた一新著を得た。一體勞働者を一個の商品扱にして、彼等の勞働條件の決定される場所を勞働市場などゝ云ふのは、正しき事であるかどうか、往年英國で職業紹介所を勞働取引所（Labour Exchange）と呼んだと同じ間違ではなからうかとも考へられるが、此點は姑く措いて、本書の內容を見よう。

本書は三編十五章に分たれて居る。第一章は勞働市場に於ける供給幷に需要の要素を題し、著者の所謂勞働市場の變動する事情から、進んで失業の原因に關する說明に入り、其原因として個人關係のものと、社會關係のものとの二ツを擧げ、救濟策として生產の確實、交互的需要、勞働能率の保存、救濟工事等を擧げて居るが、是等は何れも救濟策の發端であつて、著者が眞實勞働市場に於て、需給關係を調節する方策と認めて居るものは、第二編勞働市場の機關と題する所に示されて居る。即ち此編に於て、著者は前後七章を設け、戰前の勞働市場、公立職業紹介所の發達、戰爭と職業市場、合衆國の職業紹介、英國幷に加奈陀の職業紹介制度、聯邦職業紹介、職業局に就て論述した。著者は國民をして仕事に就く機會を得るに就て、料金を負擔させるのは、不合理であると云ふ理由で、私立の職業紹介所を排斥して居るのは、同感であるが、然も著者は一躍國立の紹介所を主張するのでもなく、寧ろ Federal-State-Municipal Co-operation を稱揚して居る。是れは合衆國の政治組織に調和させる窮策であつて、著者の意は寧ろ英國幷に加奈陀の中央集權的制度を可なりとするに傾けるやに見受けられる。

第三編は職業に關する特別の問題と題し、勞働の分類や、農業勞働者の地方的狀況を論じ、最後に失業保險の問題に就て、僅々二頁を割いて、其一端を述べて居る。本書の全體から云つて、本編殊に本編の後二章の如きは、全然省略して可なるものと考へられる。

著者は現今ウヰスコンシン大學の敎職に居るが、以前ミンネソタ州政廳で、勞働行政の實際に枩掌した經驗がある。本書を通じて時に一局部の事柄に止まるが、實際の事情の引抄されるのは、此爲めであつて、讀者に多少の興味を添へる。兎に角失業問題の研究者に取つては、簡單な述作ではあるが、ビーヴエリッヂの著書と共に、併讀す可きものであり、又其價値はあると信せられる。（堀江歸一）

G. D. H. Cole Guild Socialism

Restated. 1920 Price 6/-

ギルド社會主義は生長しつゝある社會學說もしくは社會改造の理想である。從つてそはギルド社會主義の正統派と稱すべきものは、本書の著者コールの云ふ如く、存在してゐないものである。然し、ギルド社會主義者は約三つの觀點からその學說を構成したものと云へやう。その一は賃銀制度の批評である。その二は中世紀主義殊にその公正なる價格 Just Price の立場である。その三は勞働組合主義の立場である。さうして著者コールは第三の代表者であり、且つギルド社會主義者中最も popular な人物であることは云ふまでもないことである。

今著者はその立場から近年におけるギルド社會主義の發達を參照しながら、舊著の足らざる所を補ひつゝ本書を執筆したのである。先づ筆

をギルド社會主義の根本思想たる自由の要求に起し、自由は單に政治的なるのみならず、經濟的なることを要すとし、更らにその自由を確保すべき制度としてのデモクラシーの基礎即ち屢々その舊著において論じた所謂機能的民主主義 functional democracy を論じた。かくて第三章に入つて機能的組織の一としてのギルドの構造を、第四章に産業的ギルドを論じ、第五章に入つては以上の生産方面より轉じて消費方面を觀察し、消費を家庭用、個人用の消費の部分と共同消費例へば一都市における水道、瓦斯の如きものに分つた。（コールは前者を personal and domestic consumption、後者を collective consumption と呼んだ。）さうして、その前者に對しては消費組合運動、後者に對しては、都市社會主義の重要なることを述べ、ギルド社會主義の社會においても、それ重要なる地位を占むべきことを論じた。次にその國家論を論じてゐるが、彼は國家 state なる文字を用ゐること少なく、殆んど之を commune なる語に換へたことは吾人の注目に値することである。これと同時にコールは National Guild の主張者であるが、この書においては著しく centralization を斥けて decentralization を強調した點は、その state に代ふるに commune を以てせんとする傾向と共に吾人の注意しなければならぬ點である。

而して本書の特徴の一とすべきは、從來にも増してギルド・ユウトピア（かゝる語を許すとせば）を描くことに熱心である點である。コールは、このユウトピアを描くのは、從來の社會がこのユウトピア通りにならなければならぬとするためではなく、之によつて將來の社會に對する考察を盛んならしむるためであると云つてゐるが、この點は融通の利く、——惡く言へば妥協的の——英國人的氣質とも考へられるし、またユウトピアを描きながら、ユウトピアンと云はれない理由ともなるであらう。

その第二の特徴は嘗てギルド社會主義者が論じたことのない農業上にギルドの原理を論じてゐることである。（コールはその著の脚註において National Guild League が農業上の問題について研究してゐて、之に對する解決を近く發表するだらうと記してゐる。）それからその第三は世界におけるギルド主義的運動を觀察した點である。

要するに本書はコール最近の立場を知り得ると同時に、從來の著書を系統立てたものとして、且つ生長しつゝある學説の中間的産物として、ギルド社會主義研究家の好參考資料であらう。

（加田哲二）

池田龍藏著　**株券市價論**

四六判二〇九頁
定價二圓七拾錢
大鐙閣發行

株券市價は經濟界のバロメーターであることは誰も知つてゐる。そうしてその研究は「單に取引所關係者及び株券投資家にとつて重要なるみならず、苟も商業界、經濟界に關係を有するもの」の看過すべからざるものであるといふことも異議はない。然しながら「此の方面に關する注目すべき研究の發表は誠に寥寥たるもので」「大部分は所謂相場虎の卷式の非科學的のものであつて、組織的、系統的に出來て居るものは殆んど見當らない」ことを「當代學界の不祥事」として本書は嘗て同じ著者の手に成りたる「無盡の實際と學説」と同じく「今後著書として公にしたき希望」を以て再び「稿本」と銘打つて上梓せられたものである。以て著者の意氣とその眞摯とを察すべきである。

著者は先づ株券市價論と一般物價論との關係を觀察し、「株券の市價も一般物價と同じく之れに對する需要供給の一致した點換言すれば株券需給者の競爭によつて定まるものと云ふ原理」を道破し、次いで遂ひに「今日まで科學的に調査討究せられなかつた」株券に對する需給を決定する要素を、一株券及其會社の內部的要素、二株券及其會社の外部的要素となし、更らに前者を九項に分ち、後者を六項に分ち、それぞれの項目を細分して簡單なる説明を加へてゐる。